深川澪通り木戸番小屋

北原亞以子

深川澪通り木戸番小屋
北原亞以子
© Aiko Kitahara 1993

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1993年9月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185484-4

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

深川澪通り木戸番小屋

北原亞以子

講談社

目次

深川澪通り木戸番小屋　七
両国橋から　四一
坂道の冬　七一
深川しぐれ　一〇七
ともだち　一三九
名人かたぎ　一六九
梅雨の晴れ間　二〇三
わすれもの　二三五
解説　縄田一男　二六四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

深川澪通り木戸番小屋

深川澪通り木戸番小屋

夜になると、川音が高くなる。深川中島町は三方を川でかこまれていて、木戸番小屋は町の南を流れる大島川沿いの、俗に澪通りと呼ばれる道の端にあった。町の西側へ流れてくる仙台堀の枝川と、大島川が一つになって隅田川へそそぐところである。

大島川の向こうは新地と呼ばれる岡場所で、隅田川河口の見晴らしのよさを売物にした、百歩楼、大栄楼などの贅をつくした高楼が建ちならび、いつもなら、三味線や太鼓や、客をはこんできた船頭の声や、出迎えの女軽子と呼ばれる茶屋の女中の声が風にのって聞えてくるのだが、今日は暮六ツの鐘を合図に雨が降り出したせいか、酔客の大声さえも聞えてこない。

あまりの静かさに、笑兵衛は表戸を開けてみた。向かい側の川岸にある自身番の灯りがかすんで見える。雨は、音もなく降りつづいているらしい。

「寝かせてもらいますよ」

声にふりかえると、女房のお捨が四畳半一間の上り口に立っていた。眠そうに目をしばたたき、それが恥ずかしかったのか、首をすくめて笑う。ふっくらとした頬の片方にえくぼができた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自身番に交替で詰めている差配の一人、弥太右衛門は、笑兵衛と顔を合わせるたびに、まったく品がよくてきれいなおかみさんだと、感に堪えないように言う。が、さすがに年はあらそえず、髪に白いものがふえてきた。先日、笑兵衛が自分の年をかぞえてみて、五十三になったと言うと、「あらいやだ、そんなにお年寄りだったんですか」と笑いころげたが、お捨だって四十九になっている筈だ。

急に雨と風が強くなって、吹きつけられる雨の音が川音よりも高くなった。笑兵衛はあわてて戸を閉めた。内職に売っている草鞋、蠟燭、手拭い、そのほか雑多な品にかぶせた風呂敷が、風でめくれあがっている。お捨が土間へ降りて来ようとしたので、笑兵衛は手を振った。

「いいよ。早くお寝み」

「すみませんね、あなた」

お捨は片頬のえくぼを深くして頭をさげ、寝床の中に入った。

木戸番夫婦は、夜と昼とのすれちがいで暮らしている。夫は夜、町木戸を閉めてから医者や産婆など緊急の用事がある者のためにくぐり戸を開けたり、夜廻りに出たりするのが仕事であった。ところが、町からその仕事に支払われる手当では暮らしてゆけず、なかば公認のかたちで番小屋の土間を店にして、女房が昼間、荒物や駄菓子を売っているのだった。

しばらく上り框に腰をおろしていた笑兵衛は、腰を叩きながら立ち上がって、土間の壁にかけてある蓑と笠をおろした。そろそろ夜廻りに出かける時刻だった。

予備の蠟燭を持ち、灯が消えた時の用心のため、火打石もふところに入れる。雨戸が風に鳴っ

ていた。
蓑笠をつけ、行灯の灯を蠟燭にうつそうとすると、眠っていた筈のお捨が起き上がった。
「どうした。眠れないのか」
「いえ――」
お捨は袢纏を羽織って寝床から出た。
「誰か、来てますよ」
笑兵衛は戸口に近づいた。雨戸は風に鳴っているのだと思っていたのだが、確かに誰かが外にいる。開けようとする戸に寄りかかってしまうので、ただでさえたてつけのわるい戸は敷居からはずれ、それをまた無理に開けようとしては、意気地なく寄りかかっているらしい。
「怪我をなさっているんじゃありませんか」
と、お捨が言った。笑兵衛は、はずれている戸を敷居にはめこもうとした。が、外ではまた寄りかかっているらしく、思うように動かない。やむをえず、お捨の手も借りて力まかせに戸を開けると、支えを失った男が土間へ転げ込んできた。ぬれねずみの若い男だった。
「勝次じゃないか」
笑兵衛が抱き起こすと、お捨が行灯の灯を近づけた。目をつむったまま荒い息をして、軀のあちこちに擦傷があるが、大きな怪我はしていないらしい。吐く息が熟柿くさかった。
「ばかやろう、足腰もたたなくなるほど酒を飲んで――」
笑兵衛は、言いかけた言葉をのみこんで苦笑した。家の中に入れた安心感からか、勝次はもう

寝息をたてている。雨戸に寄りかかって半分眠っていたのかもしれず、お捨が気づかなければ、この雨と寒さで、死なぬまでも高熱ぐらいは出していただろう。

雫のたれる着物を脱がせ、正体もなく眠りこけて重い軀を、二人で苦労して座敷の上へ運ぶ。お捨は、戸棚の奥から浴衣のほどいたものを出した。幾度も洗濯をして布地がやわらかくなっているので、近所の若夫婦に子供が生れたなら、おむつをつくってやろうととっておいたのだが、ずぶぬれの軀を拭くにはちょうどよかった。

ためらう笑兵衛を押しのけて、お捨は勝次を素裸にした。強く摩擦するように勝次の髪や軀を拭い、手早く笑兵衛の下着や着物を着せて、寝床まで転がしてゆく。

「年齢ですねえ」

よほど重かったのか息がはずんでいて、お捨は額に手を当てて苦笑した。

「いや、若いよ」

笑兵衛が夜具をかけてやると、勝次は、うるせえとわめいて両腕を突き出した。

笑兵衛とお捨は、思わず顔を見合わせた。勝次の左手は、小指から中指までが掌に貼りついて、折れ曲がったままになっていた。南組三組の纏持ちだった勝次が、去年、左肩から左腕にかけて火傷を負い、ついに癒すことのできなかった傷であった。

目が覚めた。一瞬、どこにいるのだろうと思った。

軀を起こそうとすると、頭が割れるように痛む。目をつむり、こめかみを押えて夜具の上に坐

った。

「目が覚めましたか」

女のやわらかい声が聞えた。勝次は、ゆっくりと目を開いた。草鞋や蠟燭や手拭いや、鼻紙などを所狭しとならべた店が見え、姉様(あねさん)かぶりの女の姿が見えた。

「ここは……」

「澪通りの木戸番小屋ですよ」

姉様かぶりをとった女はお捨で、痛む頭を横に向けると、隣りの寝床で笑兵衛が眠っている。着ている物も自分のものではなかったが、なぜ木戸番小屋で他人の着物を着て眠っていたのか、まるでわからなかった。新地へ遊びに行って、帰りに大島町の居酒屋で飲んだところまでは記憶にある。雨が降っていたことも覚えているが、どこをどう歩いてここへ来たのか、まったく思い出せなかった。

「ごはん、食べられる？」

と、お捨が言った。食べられるどころではなかった。頭は錐(きり)で刺されるようだし、胸は油で焼かれているようだった。焼かれた胃の腑(ふ)の皮をはがされるようなおくびが出て、顔をしかめると、お捨は口もとに手をあてて笑った。

「それじゃ、濃いお茶でもいれてあげましょうか」

お捨が座敷に上がって来たので、勝次は頭の痛みをこらえて立ち上がった。その姿を見て、お捨はまた笑った。火傷のあとを笑われたのかと思ったが、お捨は、笑兵衛の着物が勝次の軀に合

わず、手足がむきだしになっているのを笑ったのだった。

「駄々っ子ね。うちの笑兵衛さんも小さい方じゃないけれど、あなたは特別背が高いから」

つまらないことで笑う女だと思った。第一、ころころと転がるような声で笑われては、痛む頭にひびいてたまらない。顔をしかめて頭に両手をあてると、お捨は、ごめんなさいと声を出さずに言って口許を袂でおおった。

娘のようなしぐさだが、妙に品がある。笑兵衛とお捨については、日本橋の大店の夫婦だったと言う者もあり、京の由緒ある家の生れで江戸へ駆落ちをしてきたのだと言う者もあって、澪通りの木戸番小屋へ住みつくまでのことは、結局誰も知らないらしい。

笑兵衛だの、お捨だのと、ふざけた名前をつけやがって――

胸のうちで毒づきながら熱い茶をすすっていると、「笑さんは、まだ寝ているかい」という声がした。弥太右衛門の声だった。

自身番屋に詰めるのは地主や家主の役目だったのだが、いつの間にか弥太右衛門のような、家主に雇われて貸家を管理する差配が詰めるようになり、町のこまごまとした事務も書役が雇われて勤めるようになった。市中見廻りの町方同心が「何事もないか」と尋ねてゆく所でもあり、自身番は忙しい筈なのだが、弥太右衛門達は始終将棋をさしている。おそらく、今も笑兵衛を誘いに来たのだろう。

何気なく木戸番小屋をのぞいた弥太右衛門は、勝次の姿を見て舌打ちをした。

「お前、こんなところで何をしているのだ」

「別に」
勝次は横を向いた。こんなことには慣れているのか、笑兵衛は目を覚ます気配もなく、軽い寝息をたてている。お捨は、勝次の寝ていた夜具を二つに折って、弥太右衛門の腰をおろす場所をつくった。
「呆れたものだ。毎日毎晩飲みつづけて、軀をこわしたらどうする気だ」
「もう、こわれてらあ」
お捨が弥太右衛門に茶をすすめた。弥太右衛門は、夜具をたたんだあとへ腰をおろした。
「お前に親がいたら、わたしと同じことを言う筈だよ。火消しが手前の家にも帰れないほど酔っ払って、もし昨日の晩、火事でもあったらどうする気だ」
勝次は、口から出かかった言葉をかろうじて飲みこんだ。その左手で火消しは無理だから、見附警固の役人や寺社参詣の際の供廻りに弁当を届ける賄い屋で働いてくれと、先月の末に頭から言われたことは、まだ誰にも話していなかった。
「聞いて下さいよ、お捨さん。ご存じの通り、こいつはわたしの店子でね。火傷をするまでは、鳶にはめずらしく、博奕も深酒もしない男だったんだが」
「それどころか、とても優しいお人でしたよ」
「うるせえな」
「いいじゃありませんか、お話したって。実はね、弥太右衛門さん、勝次さんがわざわざここまで手拭いや蠟燭を買いに来て下さるので、わけを尋ねたことがあるんです。そうしたら、少しで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com